

文化高知

2000年1月 NO.93



「龍遊」中川子暢

〈もくじ〉

高知の『お酒の合理性』と『見所ウォッチング』	葉狩公良	2
年頭・雑感	ベギー葉山	3
市民ミュージカルの現況	細木秀雄	4~5
牧野富太郎記念館開館に寄せて(上)	里見和彦	6~7
国際芸術交流展 INDONESIA-JAPAN 高知展	北 泰子	8~9
これからの大学による生涯学習	村瀬儀祐	10~11
土佐のおしめ 正月にみる土佐びとのところ	岩井信子	12
電気自動車のまちづくり	山田裕司	13
風俗歳時記・風伯		14~15

(財) 高知市文化振興事業団

高知の『お酒の合理性』と『見所ウオッチング』

葉狩公良

新春早々はばかられる言葉ですが、高知に赴任するにあたり先輩より「死ぬなよ」と送り出されてはや一年半が経過した。もちろん「お酒」のことである。高知が酒の国という情報はわが人事部にはない。

私はどちらかという酒は弱い(不得手な)ほうである。そんな私が何とか生きながらえているのも高知の酒の「合理性」の故であろう。初めての宴会の時、乾杯が終わるや否や東京風に「まあどうぞ」と挨拶がわりに注ごうとすると、ある高名な方より「バタバタしないでゆっくりやろう。まず食べなさい」と指導をいただいた。半信半疑、ちょうど結婚式に平服で出ると聞いた時と同じような気持ちでいると、確かに皆さん食べておられる。おまけに巻寿司のようなご飯ものまで頬張っていらっしやるのである。

上司に教わった「人より先に食ってはならぬ」とのルールと違うのである。つまり、酒を飲むにあたりまずお腹に何かものを入れてから強烈に飲むということである。最初に物を食べるから当然お酒は辛いのである。高知の酒ではあんなには食べられない。また、酒飲みをサポートするために、猪口が小さめであり、猪口に酒が残っていれば「これは冷めた」といつ捨てられるのも平気である。少なめに注いだり、ゆっくり酌をしたりと相手のペースを思い遣る仕組みができていようだ。

さらに、中座する人が増えたのを見計らって「私も失礼します」と挨拶すると叱られる。かえってこっそりと居なくなるのがいいようだ。二、三次会においても同様だ。表向きはお互いに気を遣わない様子であるが、実は相手の健康や都合にも気を配つ

たたいへん合理的な酒の飲み方だなと感心している次第である。

着任早々、多くの方から「高知を楽しんでいってください」とやさしい言葉を頂戴した。幸い私の趣味は「街角ウオッチング」であり、休日には車や自転車を駆って高知中をキョロキョロとしている。高知の見所を私なりに紹介すると、

- ①高知城天守閣・見渡す景色は天下人を思い起こさせる。上司によれば「禁煙」表示は全国一とか。
- ②日曜市・高知の特産・名産がこじやんと揃い、赴任早々のものでも高知通になれる。
- ③よさこい・「踊り子の汗が飛び散る距離」で衣装に化粧に踊りに曲にハイテンション、来年は「踊るぞ!」という気にさせてしまおう。
- ④龍河洞・あのワイルドさは子供にも大人にもカッパルにも忘れていた何かを思い出させる。
- ⑤詩とメルヘン絵本館・子供はアンパンマンと遊ばせておけば、夫婦に甘い青春を呼び戻してくれる。
- ⑥池川渓谷・新緑や紅葉を求め狭い道を上ればそこには川魚のジャンプも。特に夕暮れ時は人気が少ないので独占できる。
- ⑦琴ヶ浜・耳を澄ませばその名の由来がわかる。お弁当を持って夜須



- ⑧龍馬像の前・気持ちは太平洋の遠くはるかに。
 - ⑨大堂海岸周辺・将来のリゾート。
 - ⑩酒・日本一の淡麗辛口。好きになれる。
- 高知を楽しむもうとする必要はない。すべてが楽しいのである。(はがりきみよし/商工中金支店長)

年頭・雑感

ペギー葉山

二十一世紀への前奏曲が聞こえてきました。舞台ではどんなシナリオが待っているのでしょうか? それを演出し、演じるのは私達。その日のために、これからの「時」を大切にしたいと思います。ハッピーな二十一世紀を皆で創るために……。

何はともあれ、謹賀新年”
二〇〇〇年 元旦



と、これが私の新年のご挨拶。年賀状の中央には、今年の宮中歌会始の御題「時」を朱墨で書き上げました。二十一世紀の門を叩きながら、過ぎ去った二十世紀に思いをはせ、反省し、未来に向かっての夢を築く大切な年、それが二〇〇〇年ではないでしょうか。

昨年の十一月十三日、NHKテレビで放送された「土曜特集」そして「南国土佐を後にして」が取り上げられました。あの歌のヒットから四十年の「時」が流れました。NHKのデスクには多くの反響の電話が寄せられたそうです。私自身、地方公演の途中、新幹線や空港でたくさん見知らぬ方々から、「拝見しましたよ」「感動しました」という声にとても幸せでした。友人で文学座の俳優川辺久造さんからも電話がかか

って来て、「俺は泣いたよ! あんなエピソードがあつたなんて……全く知らなかった。今更ながらあの歌の感動が波打って来てねえ」というお話をした。

「ペギーさんって高知出身じゃなかったんですね」「ペギーさんって、あの『南国土佐を後にして』でデビューしたんじゃないんですね」「あの歌はNHK高知放送開局のテレビ番組で歌った歌なんですネ」etc.……。あれから四十年の歳月が流れると、あの歌とのかかわり合いや誕生をほとんどの方が御存知なようです。と同時に、あの忌まわしい二十世紀の戦いの中で誰ともなく歌われ、歌い継がれたのだということ、あの歌が平和への祈りの歌だということを考えると、お酒の席でいい気分でお酒のいい歌を歌うのも良いけれど、心の何処かに、あの歌を歌いながら郷を思いながら異国の地に散って行った鯨部隊の尊い命に対しての想いが欲しいと思うのは私ばかりではないでしょうか。

学生時代から歌って来た「時」の流れを数えると、今年で五十年。そんなに長い年月かと半ば驚きながら、時の流れが早いと感じるのは多分私が「幸せな歌手」だからかも知れません。そしてその中にある歌が大切

な位置を占めているのです。高知へ着くと、「お帰りなさい!」、出発の時は、「何時帰られるの?」、朝市を歩けば、「ヤァー! 帰って来たネ」と、いつも温かい笑顔でお声をかけて下さる元気な高知の皆さん。

たくさん野菜や新鮮なお魚を買い込んで大荷物を抱えて帰る私。四十年の歳月の中で知り合った方々の中には私に「道標」を下さった人生の師もたくさん居られます。地場産業の発展に常に力を注がれる橋本知事から時折送られて来る高知の産物に、「こんな素晴らしい味をもっと全国の皆さんに知って頂きたい!」と心から思う私。高知との未来は限りなく広がって行きます。

それより今年よさこい祭りには、絶対ノ絶対ノ踊りの輪に入ろう!。四十年の時の流れの中で私はいつのまにか「高知の女」になっています。(ペギーはやま/歌手)



市民ミュージカルの現況

細木秀雄

高知市文化振興事業団十五周年記念の市民ミュージカル「光の中で…」が上演された。事業団は三、四年ごとに創作ミュージカルを制作していて、これが四作目になるから、相当な実績である。今回は原作を全国から公募した。当然入選作は出るが、それをそのまま上演できるような作品を得ることはほとんどないといっている。制作者や演出家が何らかのかたちで原作を改変せざるを得ないが、そこで原作との間にねじれが生じることが多い。これは観る側の常識である。

開幕すると、かなり大がかりな舞台で、劇中劇の戦いに疲れたシユメール人が、救いを求めて、地底神アガルタの出現を祈るクライマックス場面である。ところがせり上がってきたのは酔っぱらった劇団主宰者の川野で、彼はすぐ舞台から連れ出されるが、なおも再三登場して、舞台を台なしにしてしまう。

「ミュージカル」はもともと「ミュージカル・コメディ」だったから、先祖返りと大目に見ようとも思ったが、どうものつけに主人公が悪ふざけみだりにこのこ出てくるようでは、作品自体に対する信頼感が揺らぐ。私はさしあたり第一幕に期



待することを半ば断念した。

川野は一方的に劇団解散、断筆宣言をする。総無責任時代の現代を風刺しているわけでもない。公演後の打ち上げや劇団事務所でのドタバタが延々と続くが、局面の変化はないから、出演者一同の精いっぱいな熱演を見ながらも、気分が乗らない。

川野は天才的劇作家ということになっっているから、発想としては期せずして、いわば芸術家物の部類に入る。芸術家の挫折と苦悩と再起を描くのはよっぽど難しい。後段、川野が台本を書き悩んで、ご多分にもれず頭をかきむしり、書きかけの原稿を破り捨てる類型的な場面があったりするが、川野を主人公にしたため、書き手は随分苦労したことだろうと推察される。影の作者であった愛妻を失って、しばしば「夢子オ」と絶叫するような芸術家を主人公に設定するのは少々気恥ずかしいのではな



いか。

ようやく場面変わって、川野の故郷の高知県河童村になる。村長がまだ若くてキモノ姿の艶っぽい女性なのは、意表をういて拾い物だった。この女性村長の登場で、急に舞台上に生気が出てきた。フィクションな人物だが、作中で唯一ヒューマンな魅力のあるキャラクターである。皮肉なこと多数の都会派登場人物より、ずっとソフィスティケーション味がある。キャストされている人は場慣れしていて演技力もある。

彼女は川野を利用してミュージカルの里プロジェクトを立案して、村おこしをしようとする。この作品は第一幕の終わりごろから、ようやく物になり始める。

第二幕。川野が絶望的に落ち込んでいるところへ、不思議な少女が現れ、夢子の姪のひかりと名乗って未完の脚本を渡し、川野を力づけて消える。

つなぎの場面があった後、ようやく劇の核心部が見えてくる。水の精霊エンコウの少女ヒマワリと、少年のころの川野が川遊びをして愛のしるしの指切りをした想い出が蘇る。精霊と人間の禁じられた愛の悲劇と、心の中の光をモチーフにしたミュージカルが織り成されていく。もともと、このあたり原作とのひずみが出ているとみえて、ヒマワリとひかりと夢子が、分離したりこんがらがったりしている。

第九場「秋の神祭(エンコウさん)」が最好調である。花道や本舞台のセリを頻繁に使って、ひかりがしきりに出没変幻して歌うとともに、この作品の意味が次第に解き明かされ、劇的情緒が高まる。ひかり役は歌唱を含めて際立った好演であり、なまじ踊ったりしないのもいい。彼女が出る場面はいずれも精彩がある。

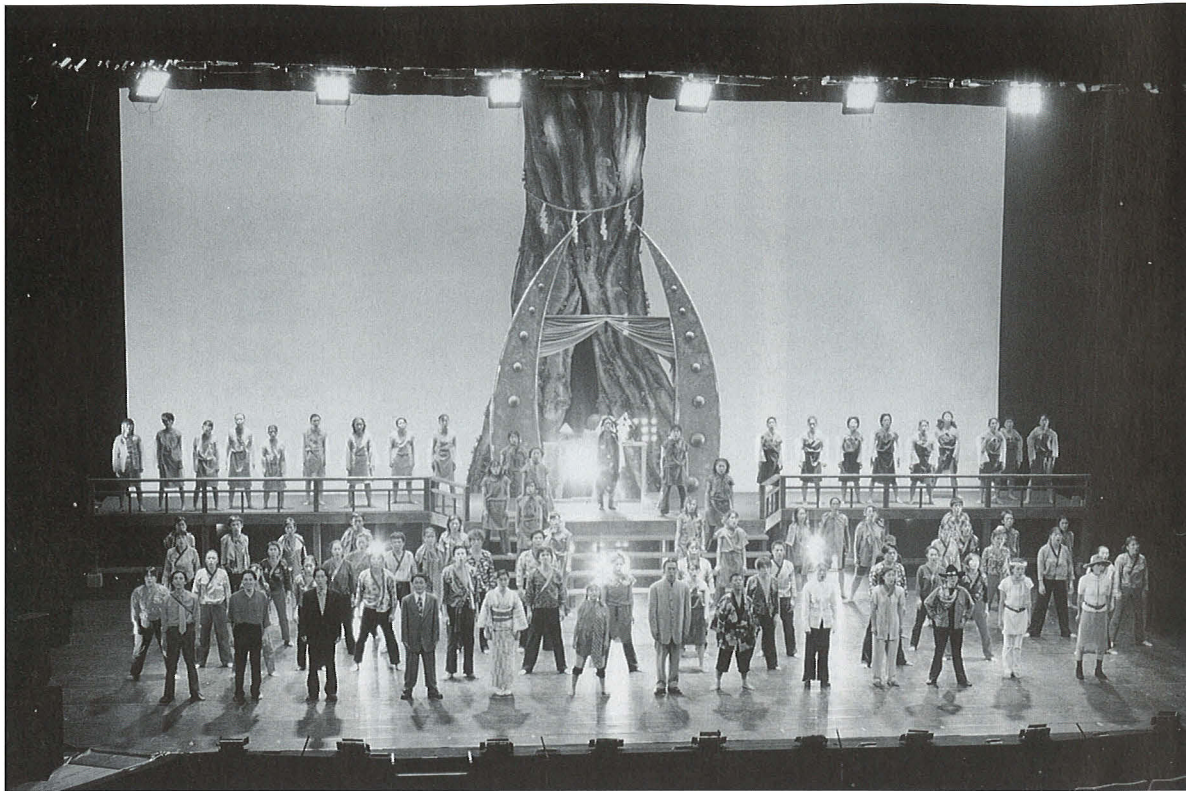
暗転して、後半はエンコウ神社の秋祭り、神殿から荘厳な感じでひかりが登場する。この場のひかりは幼い日の愛の誓いに殉じたヒマワリ

そのものになっている。掟を破った罰を受けると語って、再び神殿に隠れた彼女を川野が追う。エンコウの世界を表象する水中幻想的な場も悪くない。ここではヒマワリと夢子がダブル・イメージされている。

全十一場あるが、冗漫な部分を整理して再構成が望まれる。本来、河童村の場だけで成立する作品である。今回は総じてスタッフの世代が若くて、それなりの新鮮さがあった。事業団のミュージカルが毎回ゼロからの出発になって、積み重ねがみられないのは残念である。将来的には台本が課題である。

アメリカ映画によく見かけるミュージカルで、画面後景のコーラスの左右両端の踊り手は、激しく踊る度に体が半分くらい画面から切れている。だがその踊りの技術やスピード、切ればまったく一糸乱れず、そのアンサンブルに感嘆させられる。あれが現代のミュージカルのレベルだとすれば、われわれは歌と踊りで見せるなどと高望みせずに、せめてドラマチック・ミュージカルに活路を見いだすよりほかにない。

(ほそぎひでお／芸能評論家)



舞台いっぱいに繰り広げられた市民ミュージカル「光の中で…」。8カ月にわたって厳しいレッスンを積んできた団員のパワーが観客を魅了した(県民文化ホール・オレンジ)

牧野富太郎記念館開館に寄せて(上)

牧野富太郎との対話

里見和彦

「文化高知」の読者の皆様、はじめまして。私はこの九月より高知県立牧野植物園に勤務している学芸職員です。職員としては一番の新前ですが、この五年半の間、東京の一民間展示デザイナーとして、牧野富太郎記念館のすべての展示設計を担当



ポウブラを前にして(昭和14年・77歳)

させていただきました。今回、編集部の方よりこの機会を与えられたので、牧野富太郎記念館プロジェクトの中で「デザイナーが考えた事や館内の見どころなどを、二回にわたりご紹介させていただくことにしました。」

博士との出会い

高知市で生まれた私は、小学校、中学校、高校と春の遠足はいつも五台山でした。護国神社に集合し、皆で一列になって細い山道を登り、牧野植物園の芝生の上で昼食をとったことを懐かしく思い出します。しかし、牧野富太郎という人がいかなる

人物であったかという事は知らずともしませんでした。南国土佐を後にして、都へ出てから二十五年……四半世紀を経て、思い出の遠足の地で働くようになることは夢にも思っておりませんでした。今から六年前(一九九三年五月)、私は当時手がけていた岩手県の博物館の展示企画調査で、約十八年ぶりに牧野植物園を訪れ、牧野文庫で牧野博士関連資料を見させていただきました。

当時私は、博物学者というものに強く興味を持っていましたので、牧野文庫の蔵書の分野の多彩さと、それを私財で収集したという事実に触れ、博士のボーダレスな感覚と、その心意気にいたく感動しました。そして、帰りに博士の人懐こい満面の笑顔の写真を見せていただいた時、これまで名前のみしか知らなかった今は亡き博士と、はじめて名刺交換をしたような、鮮やかな出会いの印象を持ちました。

亡き牧野富太郎との対話

さて、私はこの二十年間、東京で各地の博物館の展示デザインを手がけてきました。牧野富太郎記念館は九カ所目の施設になります。博物館

の展示設計は、徹頭徹尾そのテーマである土地や過去の人物の声なき声に耳をかたむけることにあります。(他のデザイナーのやり方は知りませんが……)それが私の方法論であり、絵や図で造形表現をする段階は最終章と言えます。それは、デザイン行為をする前に、その企画やアイデアがテーマに対して謙虚であるか、自分のエゴを表現しようとしてないかと推敲を重ねるということですが(他のデザイナーのことは知りませんが……)。

それはもっと端的に言えば、「死者との対話」と言えます(私は人文系博物館が多かったのです)。この五年半という時間は、私にとって、「牧野富太郎との対話、もしくは肉体を失った魂と現世を生きる魂との対話」という濃密な時間でした。

亡き牧野富太郎との対話は開館後も続き、私がここを去る日まで、彼は私に何かをインスパイアし続けてくれる事でしょう。展示の調査を始めた頃、私の興味は博士の植物画に見られる線の精緻さやそこから伝わる植物学に対するその常軌を逸したエネルギーに向かっていました。また、研究のための多額の借金や、学問のためなら堂々と先輩にも反論し、

時には攻撃することも厭わないという姿勢にも興味を持ちました。皆様の中にもそこに共感された方がいらっしゃるかも知れません。しかし、牧野富太郎との対話が一年二年と続くにつれ、その印象は薄れていきませんでした。

何故ならば、東京の生き馬の目を抜くデザイン業界で二十年近く細々と会社の経営を維持しながら、時には顧客とも争いながらも独自の表現

を紡ぎ出して来た私の人生と、植物研究のために多額の借金を抱え苦勞した人生との間に、いかなる価値の差があるというのでしょうか……それは較べようもないことなのですが、私は思うにその間にはまったく差はないと思うからです。もしかしたら、私の方が借金もせずやってきたこととは、牧野博士よりも偉い(御遺族の方、ごめんなさい……)かも知れません。また、記念館に来場される

皆様ひとりひとりに、人

牧野富太郎の生涯 展示室

に言えない苦勞があるのだと思います。名を成して去った人より、昏迷する二十世紀末という現実を生きている皆様の方がより大変かも知れません。そのような考えのもと展示構成は、博士の「生きざま」とか「苦勞」とかをことさらに強調することとはやらず、博士のアイデンティティである植物研究の跡を、シンプルに追う形とし、その中で植物学者牧野富太郎が目指していたものが何なのかを今の人が共に考える事の出来る空間の創造に専念しました。

日本という国を背負った 牧野富太郎

牧野博士が何を目指していたのかは、誰にも分かりません。しかし牧野富太郎との対話を続けている者として、私見を述べさせていただきます。とが許されるのであれば、牧野博士は日本の全植物を調べ上げ、自然科学の基本台帳を作ることで、将来の学問、そして産業の発展の礎になるうと決心したのだと思います。

日本で初めて学名を世界に発表した「ヤマトグサ」、聖徳太子の文字を拾い、表紙の題字とした「大日本植物志」、皇紀二六〇〇年という日本の歴史の区切りに発表した「牧野日本植物図鑑」など牧野博士の数々の資料にあたる「日本」という国を強く意識した牧野像が浮かび上がります。辺境の地、土佐佐川から都に出たその男は、日本という国を強く意識するだけでなく、さらにそこから世界を見つめていたように思えます。

明治初頭、共に植物研究の発展を目指した矢田部良吉先生をはじめ東大系の学者や、南方熊楠先生など、西欧への留学で箔をつけ帰国する人々を牧野博士は横目で見ながら、日本という国にあえてしがみつき、



植物の世界 展示室

今は亡き牧野富太郎は最近私にこんな話を語ったような気がしますが私の聞き間違いかも知れません。

今回は、もっと楽しい話や、記念館の展示の見どころやプロジェクトの裏話などを述べたいと思います。

さとみかずひこ/元株サザン
クロススタジオ取締役・現高知県立牧野植物園主幹

国際芸術交流展 INDONESIA-JAPAN高知展

北 泰子



国際芸術交流展に出品した作家の皆さん

一九九九年十月二十七日～十一月七日までの約二週間、高知県立美術館県民ギャラリーにおいて、インドネシア人作家四名と日本人作家四名で国際芸術交流展「INDONESIA-JAPAN高知展」を開催しました。今回の企画では両国の作家の作品を展示するだけでなく、オープニングイベントでは、インドネシア舞踊や日本舞踊、琴の演奏や書道のパフォーマンスなど、両国の文化交流に力を入れました。オープニングに出席して頂いた大阪インドネシア共和国総領事イブヌ・サニョト氏からは今回の展覧会に寄せて、「この芸術交流展におけるインドネシアと日本の文化精神を

もった作品の融合は地理的に広大な海に隔てられ、ダイナミックな文化や環境の違いがあるにもかかわらず、芸術に対し注がれた芸術家達の情熱のおかげで、イメージネーションという橋はかけられたと広げられ、両国民はお互いの現状と熱く燃える民族精神に触れ合う事を容易にしてくれました」というメッセージを頂きました。また、高知県文化環境部長池田憲治氏からは、「本県とインドネシアは、高知市とスラバヤ市が姉妹都市、高知新港とタンジュンペラ港が姉妹港の関係にあり、文化や経済の面で交流を進めてまいりました。この企画を機会に、お互いの文化や伝統を尊重しつつ、さらに国際交流の輪が広がっていくことを期待しています」とオープニングにおいてご挨拶を頂き、高知市助役の宮地毅氏からも同様のお言葉を頂きました。

今回の展覧会には二千五百人を超える入場者を迎えることが出来ましたが、特に高知インドネシア友好会の会、高知バリ友好の会、アジア・僻地医療を支援する会の皆さんをはじめ、県内外からも多数の方々にお集まり頂くなど、大きな輪が広がり、その中で相互の文化交流のイベント



書道のパフォーマンス

しい海外の友人との展覧会は楽しいだろうという思いひとつで、展覧会をやると決めて動き始めました。企画を始めてまずぶつかったのが、大きな資金の壁でした。この壁は、高知市文化振興事業団をはじめ様々な分野の方々のアドバイスとご協力のおかげで、予算の半分を助成金でまかなう事が出来ました。これも親身

になって相談に乗って下さった多くの皆様方のおかげだと、心より感謝致しております。

二番目の壁は、当時情勢不安だったインドネシアから果たして作品を持つて作家が来日できるだろうかという事でした。これもメンバーの中にインドネシアに留学中の通訳のさきる榊原茂美の努力によって、来日

ギリギリにビザを取ることができ、情勢不安の中、デンパサルから作品を運ぶ事が出来たのです。大きな荷物（作品）を持って高知空港に着いた彼らを見た時には、ホッと胸をなでおろしました。

今回私は一つ一つ壁をクリアする中で、大勢の方々とお会い、協力を頂き、たくさんの方の知人や友人ができていきました。オープニングの日を迎えるまで、「どうしても実現させるんだ」という思いだけでやってきました。八人のメンバーと一緒に「できる!!」をただ信じて創ってできた展覧会でした。

今、やっと一歩を踏み出したところですが、私たちの夢はさらに広がります。二〇〇〇年八月五日から二週間はインドネシアのバリ・アートセンターで、八月二十六日から二週間はジャカルタで同展を行うことを決めています。また、二〇〇一年四月末から六月にかけてはフランスの作家との交流展を計画しており、同様の企画をフランスでも開催していこうと思っております。

今回初めて来日したインドネシアの作家マリア・チュイは「芸術を通じてのいろいろな出会いは、次の出会いへと繋がっていくものと考えています。来年のインドネシアの開催

を行うことが出来ました。

会期中、出品作家による地元土佐和紙を使った書道や染色のワークショップやインドネシアの作家によるオープン制作・講演会（通訳付）も開催し、会場を訪れて下さった大勢の方々楽しく参加・体験して頂く場を提供し、作家との交流を深めてもらう企画を設けました。これは同時に、私たち出品者も様々なインドネシアに関する情報、人脈を得る良い機会となりました。

この展覧会の始まりは、二十四年前にインドネシアのバリ島・ウダヤナ大学美術学生との交流会がきっかけで友人になったアグネス・ユリナワティと話をしている時、ふと出た「いっしょに展覧会をやりたいね」という言葉でした。学生時代の懐か



インドネシア舞踊

では、また新たな出会いが待っているものと確信しております。お世話になった高知の皆様は心より厚くお礼申し上げます」というメッセージを残して帰国しました。

まだまだ始まったばかりの国際芸術交流展ですが、人と人とのつながりを大切に、芸術を通して世界中の人々とのコミュニケーションを広げていけるよう、国際交流・文化交流を続けていき、微力ながら国際平和に貢献していきたいと考えています。

今回お世話になりました全ての皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

（委員長 きたやすこ／国際芸術交流会）



展覧会の入場者は2500人を超え、文化交流の輪が広がった。オープニングイベントでは、インドネシア舞踊や書道のパフォーマンス、日本舞踊などが催された（県立美術館県民ギャラリー）

これからの大学による生涯学習

村瀬儀祐

オーストラリアで日本の会計監査法人の駐在員となって働いている教え子から手紙がきた。彼は仕事のかたわら、オーストラリアの会計士(チャータード・アカウンタント)の資格取得を目指して、当地の州立大学の通信教育(大学院)を受けている。これを機会に、実務で得たバラバラな知識を今一度整理し、アカデミックな発想に戻ってみたい、との内容であった。

その便りには、当地の通信大学院のあり方に驚いたとあった。通信教育による大学院の授業は、インターネットを経由して教材や大学図書館にアクセスする自学自習が基本になつており、教官や大学の事務部への連絡は電子メールで行われ、回答は二日以内に行われることが約束されている。

一番驚いたことは、次の年度の授

業の申し込み登録を早期に行うと「抽選××名が学費免除される」というお知らせが電子メールで送られてきたことだったという。「これでは営利企業と何ら変わりはないのではないか」と、社会人受講生の獲得に対する大学の意欲に感心しショックを受けた様子であった。

確かに日本の大学は、社会人に門戸を開く点で、オーストラリアの大学に及びもつかない。高知大学をみると、昨年度より生涯学習教育研究センターが設置され、公開講座を実施している。また各学部では社会人のための大学院も開設している。

しかしオーストラリアの州立大学におけるように、社会人に向けた大学の開放の度合いも低く、社会人による大学の利用度も高くない。なぜ日本の大学は、社会人に開放されるものが少ないのであろうか。今後、

日本の大学は、その点で欧米の大学並になることが出来るであろうか。日本の大学の一般社会人に対する開放度が低いのは、大学自体の努力不足もあるが、根本的には、これまでの日本の経済運営のシステムが大学を社会人のリカレント(職業能力向上)学習の場として必要としてこなかったことよってである。

経済運営の日本型システムは、先進諸国の工業水準に追いつこうとする目標に向かって、官民一体となった総動員体制を作り出そうとするものであった。そこでは欧米で開発された工業製品をさらに洗練化させ、品質も高く安い値段で提供すれば、世界の市場で大量に販売できるという確信があった。このような日本型システムにおいては、総動員の体制に耐える人材が求められた。工業製品の洗練化をいかに進める

か、チームワークによって原価効率をいかに高めるか、売上を伸ばしシェアをいかに高めるか、といったことが重視された。そして、行政指導への従属や、職場内の協調、系列関係者や取引先とのつきあい、関係者との談合にみられるような人間関係が大切にされた。

ここでは、独創的な製品の開発や、ダイナミックな事業展開のためのリ

ストラクチュアリング、市場に含まれる様々なリスク評価などを必要とするプレッシャーにさらされることは少なかった。したがって大学教育は、社会人にとってランクの高い会社と職位を得る手段となつても、プロフェッショナルな技能や思考を獲得するリカレントな学習の場としての意味を持たなくてもよかつた。

教育内容も職場が抱えている現実の問題から離れてしまい、社会人からすれば大学は、観念的で空理空論を教育しているイメージが強くなり、遠い存在となつてしまった。日本の大学にみる社会人への低い開放度は、このような経済運営の日本型システムに起因している。

ところが経済運営の日本型システムは、最近の経済のグローバル化と企業間競争の激化のなかで、機能麻痺に陥っている。その傾向と相まって、大学を社会人もつともつと開放し、社会人のリカレントな学習に

応える内容を提供しなければならぬという状況が急速に生まれている。現代において、護送船団方式のよう

な行政指導や、仲間内のつきあひ、業者の接待や談合、職場内における先例の学習によつては、企業は生き残れなくなっている。

独創的な製品の開発、質の高いソフト財の生産、情報ネットワークの下での新しいサービスの開発、企業や組織の情報評価・リスク評価、不安定性の下での企業経営の方策など、これまでにない課題が生まれると、新しい知識や技術の学習が必要になる。大学は、このような需要に応えることなく、旧態依然としたあり方をとつていては、二十一世紀に生き残ることはできない。

高知大学の生涯学習教育研究センターは、社会人に対する大学の開放を促進する機関として昨年度より活動を開始した。また、その活動は弱く、とてもオーストラリアの大学のようにはいっていない。

しかし、近い将来、社会人に対する大学の開放が進み、我が高知大学でも、「社会人の通信大学院の受講登録を所定の期間内に済ませた者は抽選で××名が学費免除となります」という掲示をインターネットのホームページに掲げることだつて起こるかもしれない。

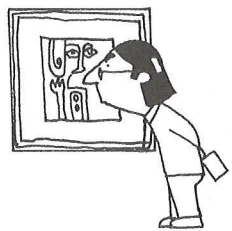
(むらせぎすけ／高知大学生涯学習教育研究センター長)



公開講座：「四万十英語留学」の様

市民フロア

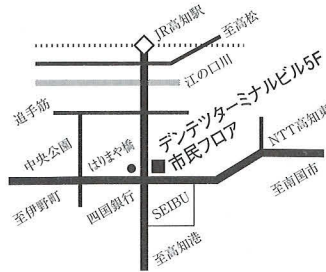
グループ展・会議に最適!



●広さ・内装 約96㎡・壁面布クロス張り
スポットライト完備

●使用料

展示	1日(9時~18時)	11,000円
	1週間	70,000円
会議	9時~12時	4,000円
	13時~17時	5,000円
	17時~21時	5,000円
※休館日	毎週水曜日(搬入・搬出日) 年末年始	



●お問い合わせ
財高知市文化振興事業団
☎873-4365

賛助会員募集中!!



会費 年額2,000円
特典

- ① 機関誌「文化高知」を年6回お手元にお届けします。
- ② 事業団発行の出版物の10%割引
(一部例外あり・直接事業団で購入する場合に限る)
- ③ 主催事業や刊行物の案内(マスコミ利用の場合あり)

お申し込み

- ① 郵便振替
- ② 現金書留
- ③ 直接事業団へ…
いずれの方法でもけっこうです。

土佐のおしめ

正月にみる土佐びとのこころ

岩井信子



年末から年始にかけて「年迎え」のその時期を、私は高知市を離れて過ごすことが多い。二〇〇〇年は北アフリカのリビア領サハラ砂漠の奥地で迎える。数年前は西アフリカのカメルーン北部の村であった。

元日の夜明け、漆黒の長身にゆるやかな民族衣装をまとった若者が、モロコシの葉で編んだ縄に白い花を挿してサバンナに掘った井戸の縁に置き、その前に一族が集って深々と



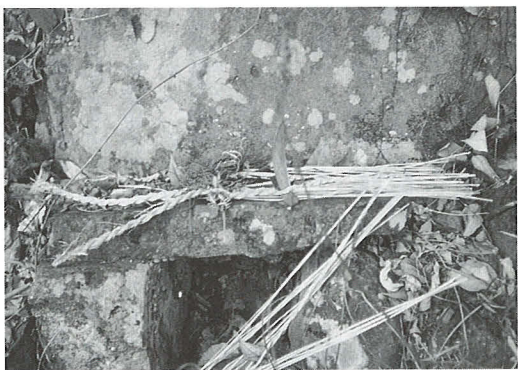
お墓に飾ったおしめ (長岡郡大豊町)

ひざまずいた。花を飾ったあのモロコシの葉の縄は彼らの「おしめ」であった。

ある年は土佐湾を一望する山の上であった。農集落の先に海がひらけ、山鼻に椿の老木が一本、海に透けていた。大晦日、麓から人声が登ってき、てはあちこちの畝に散ってゆき、老若こもごもの声に日暮れまで冬枯れの里山がさざめいた。帰省した人、それを待ち迎えた人とが連れ立ってのお墓参りであった。

明けて元旦、新墓といわず昔むした古墓といわず、お墓というお墓におしめが上がっていた。夜露に濡れた裏白、譲葉の緑、橙の黄、藁の香に朝の光が跳ね、そこはまぶしいほどに新春あらたまの景であった。

土佐の多くの地が、暮れにお墓におしめを上げる。墓ばかりではない。山間では畑の隅や道の傍の名もなき石畔にも、ぬかりなく。この石畔は



水源に飾ったおしめ (吾川郡吾北村)

キリハタの跡。かつて山を焼いて畑作をし数年を経て地力が衰えるとき別の山を焼く、原始的な焼畑農法キリハタ、その跡である。火入れの際、山に住む生きものたちに「逃げよ」と警告した。

「山を焼くぞう、山を焼くぞう。山の神も大蛇殿もごめんなれ、ごめんなれ。飛ぶ虫しゃ飛んでいけ、這う虫しゃ這うて逃げ……」

しかし、子やらい鳥は巢立てぬ雛をのこしては逃げず子を抱えて焼け死ぬ、飛ぶ翅もたぬ虫、モゾモゾと這う虫も逃げおくれ死ぬ、と、人々は焼畑の隅に石を積み、竹筒の水を手向けて、その無力な命を弔った。石畔はその跡。「塚様」とよぶ。

山間ではまた、大岩や落葉樹の大木の根元にもおしめと重ね餅が置かれる。そこは水がわずみ、滴り、やがて流れをなす、その源。おしめは神在す場所を示す標識である。みだりに踏み入ってはならぬ「穢すべからず」の標である。水源へのおしめは、湧きいずむ水を、水をはぐくむ森を、大地の生産力を、「神」と畏れる心の営為である。

暮れ十三日がおしめのない初め。夜毎にない上げて年の瀬の「しめくばり」となる。墓に塚に水源に。家の門・玄関はじめ、火元水元、納屋や鶏舎にまで、丹念に。「これで年用意ができた」とほっと呟く。

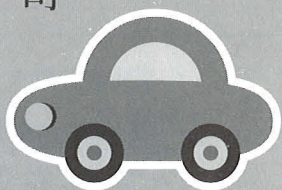
おしめは地域により家によりそれぞれ伝説と根拠をもつ。元を太陽の昇る東、もしくは太陽のまわる南に、とする地、元を川の上流に向けての地、また家の内より見て漢字の一を書きように元を左にして玄関につける家など。その地その家の伝統をこそ大切にしたい。

おしめは新年、人が日常の生活にもどるとき取りはずす。今は四日早朝が多い。下ろしたおしめは小正月宵の「どんど」(サギチヨウともいう)の火にはやし、この火祭り「正月様」を送る。

(いわいのぶこ/民俗・作法研究家)

電気自動車のまちづくり

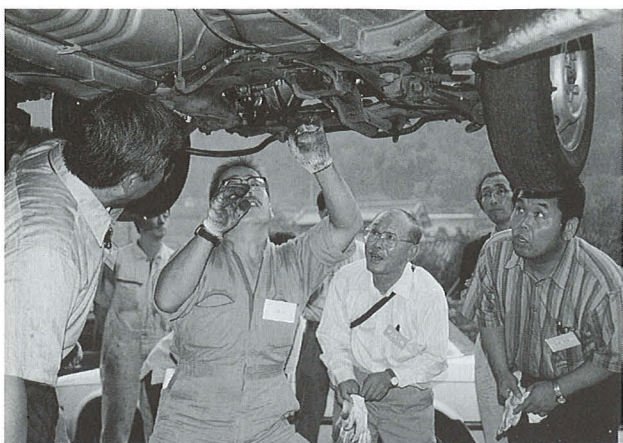
山田裕司



「香北町で電気自動車のまちづくりが始まる」、突然こんなニュースがメディアから流れて、驚かれた方も多かったでしょう。今からちょうど一年前の十二月初めの事でした。

高知新聞社を通して、神奈川の「電気自動車研究会」で「電気自動車(EV)を日常的に使う町づくり」を実行する民間グループを探しているノというお話をいただきました。

電気自動車の改造実習教室 (香美郡香北町)



以前から、これからの活動方針を環境問題にしようと思った矢先の事でしたし、いつかはEVをやってみたいノと思っていたので「香北ゆうゆうフォーラム21」として手を挙げたところ、運良く？白羽の矢が飛んで来て、日本で最初の「EVによる町づくり」がスタートしました。これまでの活動内容は、昨年の秋に環境セミナーを一回、電気自動車改造教室をのべ四日間開催したにすぎません。また、実際に使えるEVも軽自動車一台しかありません(ごめんなさい)。「なんだ、そんなものか」とがっかりされた方もいると思いますが……でも僕らの活動はまだ始まったばかりなんです。その終着点もまだまだ見えていません。

ここで少し「改造教室」の話させて下さい。それは、ごく普通の軽自動車を持ち込んで、エンジンを始めとする主要部品を取りはずし、その替わりにモーターやバッテリーを組み込んで、電気自動車を一台作ってしまおうノというかなり大胆な計画でした。

教室には、二十人を超える人が参加してくれて、しかもとても熱心な方々ばかりで、すごく順調に進みました。参加者の中には、自動車整備士の方や電気工事のプロフェッショ

ナルが数人いらして、講師の先生方と共に、大部分のシロウト集団をリードしてくれました。みんな油にまみれながら、でも目はイキイキと輝きながら、楽しく作業を進めていきました。

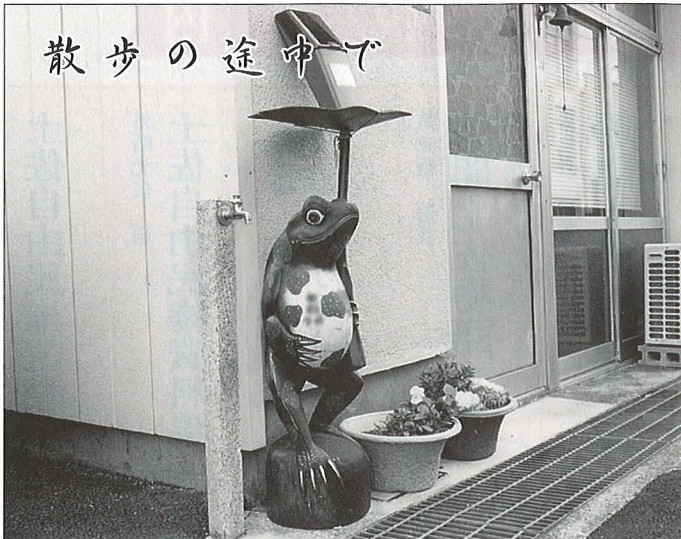
作業を始めて三日目の昼、いよいよ大詰めの段階になり、スイッチを入れて、モーターに火が入り車輪が回り始めた時の事は、鮮やかな映像となって今も目に焼きついていました。その後全員が試乗をして、成功を祝いました。

あれから数カ月が過ぎ、まだまだ解決すべき課題は多く、終わりはないものと思いますが、気長に楽しみながら取り組んでいきたいと思えます。未来は、決して逃げたりはしないから……。

今年の八月二十日前後に、「四国EVラリー」が、高知で開催される予定ですが、もちろん、僕たちも参加するつもりです。興味のある方はぜひ未来の車(?)を見に来て下さいノ。そして、やる気のある方は(今ならまだ間に合うので)ぜひ参加して下さいノ。ひよっとしたら、それはタイムマシンかもしれませんヨ!! (やまだゆうじ/染織家・香北)

(ゆうゆうフォーラム21代表)

散歩の途中



視線を感じて振りカエルと、愛らしい(?)カエル君と目が合ってしまう、思わず吹き出した。カエルがいると福がクル。カエルは家の守り神。ご主人様も無事カエル。家内安全、商売繁盛……。そついう訳が、どうい訳か。升形の住宅街でカエルが冬眠もせず、玄関横に立っている理由は謎だ。どなたか、今度カエル君に会ったら聞いてみて下さい。

風俗

お馬さん お先にどうぞ

面子の問題なのだろうか。この点で感心するのは産学界や自治体の各県が集う会合で「中四国〇〇大会」と言うことはあっても開催地が四国の場合「四中国」と称せるとの論議が起らないことだ。これは四国の人々の度量の広さだと思いたいところだ。学校で生徒の名簿や出席をとるとき男が

北海道東部に広がる湿原「根釧原野」これを釧路の人は「釧根原野」と呼んでいると開高健は何かに書いていた。同じように東京六大学野球の「早慶戦」これを慶応大学側では「慶早戦」としか言わない。二つの名詞を繋いで言葉を作るとき、どちらを先にするのは当事者にとって正に

ら始めるのは不当だと言われているが、これで思い出すのが丸谷才一のエッセイだ。男女の(これも男女としなければ叱られる?)名前をペアで呼ぶ場合に欧米では「ロミオとジュリエット」のように男性が先にくるが、日本では「お染・久松」「お軽・勘平」と女性から始まると指摘している。この日本型の方が物語やエピソードに華やぎと艶が感じられて少なくともシエークスピアよりセンスが好い。そこで郷土土佐に対する不満を一つ。よさこい節のルーツである坊さん簪の物語は「純信・お馬」が登場人物として語り継がれてきたが、こはせひ日本の美しき伝統に従い「お馬・純信」としてもらいたい。そもそも最初にお馬さんが居なければ、純信は簪など買わなかったのだから。

(南北)

高知の農業

山岡 浩 著



A5判・並製本・248頁
本体価格 1,800円

農協組織に半世紀近く勤めた筆者が地域農業・農産・農に生きる人々をつぶさに訪ね高知県農業の実像を明らかにするとともに、特徴的産地づくりの事例を紹介した書。

土佐の習俗
婚姻と子育て

坂本正夫 著



四六判・並製本・200頁
本体価格 1,400円

民俗学の宝庫といわれる土佐の村々を歩き、土地の古老たちから伝承を採集。35年にわたる調査研究の中から婚姻と子育てに関する伝承・習俗を体系的にまとめた書。

今号の表紙

「龍 游」 中川 子暢

北京の歴史博物館で、青銅器に鑄られた多くの銘文に出合った。その多彩な表現の金文から、古代人の心の深さや、美意識までがストレートに伝わってきた。以来、この精妙な世界に引き入れられて飽くことがない。制作に当たっては、現代感覚を加味し、知性を感じられる作品が書ければ、と思った。(ながわしちよう・謙慎書道会理事)

高知を撮る

第15回写真コンテスト入賞作品

寒中水泳

昭和44年
高知市旧雑喉場橋

近藤輝代彦



成人の日の恒例の行事として鏡川雑喉場橋付近で寒中水泳が行われていた。橋上からの見物人も多く賑やかであった。旧雑喉場橋も新しくなっていて、この行事もいつとはなく消え去った。

だが、世を挙げてインターネットの時代。この怪物は、いまや地球を覆う規模のネットワークに育ち、私たちに絶対服従を迫る。21世紀はインターネットの世紀。私などは「前世紀の遺物」と呼ばれても、いたしかたない。当方としては、いまさら節を屈する訳にはいかぬ。憐れみや、蔑みの眼指しに耐えて、生きて行くのみ。もっとも、中高年管理職の中に、「パソコン恐怖症」(インターネットについてゆけない症候群)にかかっている

インターネット



風俗歳時記

インターネットの普及は、多くの人に福音をもたらすが、同時に、情報アクセス、社会参加の機会に関する男女のギャップを拡大する力を持っている。 (朴)

90年現在、大学でコンピュータ・サイエンスを教えている女性は、男性のわずか8パーセント。コンピュータ製造工場で働いているのは、圧倒的に女性が多いのに、管理職の地位にある女性は数えるほどしかない。電子メディアの慣例や基準等を定めたり、意志決定をするポジションに女性が

方々があると聞いて、なにやらほっとする想いもある。さらに、「ことば」に見る女性(東京女性財団編)という本を読んで、いささか意を強くした。同書によると、アメリカのコンピュータ界には、かなりの女性差別があるそうだ。

外崎光広 著
土佐自由民権運動史

著者の四十年に及ぶ研究を集大成。新資料による見聞も盛り込みながら、土佐自由民権運動の全容を通史として明らかにした。
A5判上製本四二四頁 本体価格二、七一九円

外崎光広 編
土佐自由民権資料集

土佐自由民権に関する基本的資料百十数点を事件別に分類・収録。原資料によって各々の事件の実態が把握できるようにした。
A5判・三四四頁 本体価格三、〇〇〇円

土居重俊・浜田数義 編
高知県方言辞典

古語から現代語にいたる土佐言葉一万四七〇〇余の意味、用例、使用地点等を明示・注釈も加えた土佐方言唯一最大の辞書。
A5判上製本七三六頁 本体価格六、〇〇〇円

依光裕 編著
珍聞土佐物語(上巻)

土佐の山や海辺の村の閑炉裏端で古老が語った地元の伝説や小咄の数々。ここでは地域別に二十名の語り部の百三十話を収録。
四六判・三九二頁 本体価格一、五五三元

依光裕 編著
珍聞土佐物語(下巻)

県下各地の様々な語り部三十一名から寄せられた百二十話を採録。親から子へ、孫へ語り継ぎたい「ふるさと」がここにある。
四六判・四〇八頁 本体価格一、五五三元

岡林清水 著
高知県文学散歩

高知県の文学を地域に即して紹介。その舞台歴史、作家の足跡等を訪ねて歩く。旅のなかの文学史、ともいえる文学案内。
四六判・二七八頁 本体価格一、七四八円

山本大 著
幕末の青春

激動の幕末期を駆け抜けた坂本龍馬の一生を、史実に基づき分かりやすく描いた。子供から大人まで親しめる屈指の龍馬伝。
四六判・一六八頁 本体価格一、一六五円

藤本稔子 著
思いつきりみとめて
子育て

保育者としての長い経験からみた子どもたちのいきいきとした姿。その豊かに育っていく過程を描きながら子育てを考える。
四六判・三五二頁 本体価格一、五五三元

高知市文化振興事業団 編
わがまち百景

高知市の誇りとして残したい風景を百力所選定し、百人の随想と写真で紹介。様々な視点からの素晴らしい高知が実感できる。
A5変形判二二四頁 本体価格一、一六五円

高知市文化振興事業団 編
高知のエスプリ

県内のオビニオン・リッター五十人が、各々高知へのあつい思いを語る。「文化高知」巻頭文からカットとともに収録した。
A5判・一六〇頁 本体価格一、一六五円

高知の文化を考える会 編
高知の文化を考える

文化について多方面から検討、豊かで個性豊かな市民主体の高知の文化をどうつくり発展させていくかを、市民的立場で考える。
A5判・一八八頁 本体価格一、一六五円

清水孝之 著
中山高陽

土佐の生んだ江戸文人画の祖中山高陽の業績を明らかにした労作。資料として未発表のものを含む書簡集・年譜等を収録した。
A5判上製本三三二頁 本体価格三、八〇〇円

筒井広道 著
画帳の歲月

高知画壇の重鎮の、美と画業についての随想集。県展の知られざる内情、肩のこらな絵画論等、興味尽きない美術への誘い。
A5変形判上製本二五六頁 本体価格二、九四二円

高木啓夫 著
土佐の芸能

現存する土佐の民俗芸能をくまなく収集し体系化。それぞれを神楽・獅子舞・地芝居・太鼓踊り・民謡等に分類し、詳説した。
B5変形判上製本三四六頁 本体価格四、八〇〇円

土居重俊 監修
高知市文化振興事業団 編
土佐弁 土佐日記

紀貫之の名著「土佐日記」を、現代とさことばでつづる。古典を身近なものにするとともに、土佐弁にも親しめる楽しい本。
B6判上製本二二〇頁 本体価格九七二円

高知県緑の環境会議 森林研究会 編
高知の森林

高知の代表的な山と森林をつぶさに探訪し、残されている貴重な自然や植生、森林と人々とのかわりの歴史、現地への道のり等を紹介。
B5変形二二八頁 本体価格一、四二七円